1870309

学位論文審査の要旨

学位申請者	光橋　翠 人間発達科学専攻2018年度生	論文題目	エコロジーとデモクラシーの接点からみた持続可能性のための幼児教育―森のムッレ教室と日本での実践から―
審査委員	主　　査:　刑部　育子　教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　:　否
	副　　査:　小玉　亮子　教授		「否」の場合の理由
	副　　査:　松島　のり子　講師		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:　浜口　順子　教授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:　辻谷　真知子　助教		■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博　士　(社会科学)		■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Education)		□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
			※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

近年、持続可能性に取り組む国内外の幼児教育の研究者のあいだでは子どもの自然体験の位置づけについて、また持続可能性の取り組みへの子どもの参加について議論されている。本研究では、自然体験の位置づけについてはエコロジー(生態学)の問題として、子どもの参加をデモクラシー(民主主義)の問題として捉え直した。その上で本研究の目的を、エコロジー(生態学)とデモクラシー(民主主義)の概念を結びつけることで、子どものためのエコロジカル・デモクラシーのあり方を模索し、スウェーデン発祥の幼児対象の野外教育手法である森のムッレ教室(以下、ムッレ教室)を手がかりに、持続可能性にむけた日本の幼児教育の可能性を検討した。

本研究では、まず理論研究として、日本の幼児教育のガイドライン及び「発達」の概念を対象とした文献調査を行った。その結果、日本の幼児教育には自然科学としてのエコロジー(生態学)が十分に包摂されてこなかったこと、また「発達にふさわしい」という言説が子どものデモクラシー(民主主義)を制限する可能性があるという問題点が見出された。これらの限界を超えるために、エコソフィという思想に着目し、精神分析家フェリックス・ガタリの思想を中心に理解を深めた。その結果、予測可能性を特徴とする「発達」に替えて、予測不可能性や特異性を特徴とした「創発」という理論を包摂する幼児教育のあり方が見えてきた。

次に実践研究では、スウェーデンと日本におけるムッレ教室を対象に調査を行った。スウェーデンではインタビュー調査及び就学前学校での観察調査を行った。その結果、思想的基盤に野外生活とスカンジナビア由来のエコソフィ思想が見出された。その上で実践的示唆として、①人間と自然の関係性を見つめる場として自然を捉えること、②探究によるエコロジー(生態学)の学びを取り入れること、③自然への参加意識を育むこと、④自然をコモンズとして捉えるまなざしを保育者が子どもと分かち合うこと、⑤子どもを社会的存在として捉えることが得られた。また日本ではムッレ教室を導入した保育園でのフィールド調査を行い、子どもたちが源流から河口まで水の流れを探究する活動を追跡した。その結果、子どもたちと保育者には、流域を探索する活動を通してさまざまなアッセンブリッジ(景観の構成要素)に出会う過程で自然環境に対して倫理観や責任感が立ち現れていたことが明らかとなった。

総合考察では、子どもたちの自然界の探究から創発される倫理観や責任感を持続可能性にむけた変革に結びつけていくアプローチを「持続可能性にむけた変容のための創発の教育学」と呼んだ。以上の議論を踏まえて、持続可能性にむけた日本の幼児教育の可能性が三点見出された。一つは、子どもの発達という視点を超えて、人間と自然の関係性を探究するための生活哲学の場として園外保育を捉えること、二つに、子どもがエコロジー(生態学)を学ぶことは持続可能性にむけた変革に参加する道を切り開くということ、三つに、園として子どもの声を聴く文化を醸成することで持続可能性にむけてより豊かで多様な変革が実現されうるということであった。

今後は、実践例を積み上げること、幼児教育制度や保育者養成にエコロジー(生態学)の学びを組み込む可能性を検討すること、新しい理論や実践により持続可能性のための幼児教育の視野を広げていくことが課題とされた。